



Twilight Cinema Blues

銀平町シネマブルース

2022, 99 min, English subtitles

Director: JOJO Hideo

Cast: KOIDE Keisuke, FUKIKOSHI Mitsuru, UNO Shohei, FUJIWARA Sakura

ICA screening information:

Fri	A Man	6:10pm
2 Feb	Hand	8:50pm
Sat	Twilight Cinema	1:30pm
3 Feb	Blues	
	Sabakan	3:30pm
	Undercurrent	5:30pm
	From the End of World	8:20pm
Sun	Voices in the	1:20pm
4 Feb	Wind	
	The Snow Flurry	4:00pm
	Ice Cream Fever	5:40pm
	The Inerasable	8:30pm
Tue	Ripples	6:15pm
6 Feb	Hand (Repeat)	8:40pm
Wed	The Lump in My	6:15pm
7 Feb	Heart	
	Thousand and One Nights	8:15pm
Thu	The Lump in My	4:00pm
8 Feb	Heart (Repeat)	
	Hoarder On The Border	6:00pm
	From the End of World (Repeat)	8:10pm
Fri	Do Unto Others	6:10pm
9 Feb	Mondays: See You 'This' Week!	9:00pm
Sat	Hit Me Anyone	1:00pm
10 Feb	One More Time!	
	The Fish Tale	3:30pm
	Winny	6:10pm
	Shadow of Fire	8:45pm
Sun	The Zen Diary	1:00pm
11 Feb	YOKO	3:20pm
	Lonely Castle in the Mirror	5:50pm
	Egoist	8:15pm

DVD や Blu-ray のみならず、配信のプラットフォームを介して家庭で映画を鑑賞することが一般化しつつある今日において、映画館へ赴き映画を見ることの魅力とはどのようなものだろうか？その理由は、単にスクリーンの大きさだけに求められるものではないだろう。暗闇の中に座り、背後の光源が投影するイメージにまなざしを注ぐ観客の経験は、どこかで私たちの夢と似た構造を持っている。つまり、私たちは映画に映し出される他者の夢を、半ば無意識的に、あたかも私たちの夢ともなりうるような夢として見つめている。それ自体が発光する小さなモニターと独りで正対するのではなく、人間の無意識の欲望がスクリーンの上で交差し、観客のそれぞれがイメージの物語を編み直すのが映画館という場所ではなかっただろうか。映画館の魅力を成す、こうした空間的な共同性は、しだいに失われつつあるように思われる。

2023 年の時点において日本国内には 590 の映画館があり、同一の施設に複数のスクリーンを持つ「シネマ・コンプレックス」(multiplex) が 350 館、欧米の「アートハウス」に該当する「ミニシアター」や、旧作を中心に上映する「名画座」といったそれ以外の映画館が 251 館ほど存在している。この状況をスクリーン数で考えてみると、全体の 3672 スクリーンのうち、前者が 3244 スクリーン (88.1%) を占めており、上映される作品の均質化は年々進んでいると言えよう。経営の効率化を優先する「シネマ・コンプレックス」を一概に批判することはできないが、グローバルゼーションに抗うかたちで上映作品を独自に選ぶ映画館の存在がなければ、映画の多様性や若手映画人や観客の育成を維持することはできないし、映画館が地域の中で文化的・社会的な役割を果たすことも難しいだろう。本作の舞台となる「銀平スカラ座」は架空の町「銀平町」に設定された映画館だが、1905 年 (明治 38 年) に寄席として創業して現在まで営業を続ける、埼玉県のみニシアター・川越スカラ座をロケ地として活用している。

銀平スカラ座は、先に述べたような、ひとときの夢の終わりと始まりを私たちに垣間見させてくれる映画館の一つである。そこには、集う人々のそれぞれが映画館に対して抱く理想が断片的に組み合わされている。館内には、古典映画の傑作から SF やホラー映画まで、様々なジャンルの作品のチラシやポスターが貼られており、ロビーでは常連客たちがコーヒーを片手に楽しそうに言葉を交わしている。映画ファンばかりの閉ざされた場所ではなく、ふと寂しくなり話し相手を見つけようとして気楽に立ち寄ることもできるようなコミュニティ。雑然とフィルム缶が積み重ねられた物置部屋でさえも、静かに目を閉じて物思いに耽ることのできるような居心地の良い空間として描かれている。

だからこそ、ここには様々な人が吸い寄せられるかのように集うことになるだろう。弁護士資格を持つが、借金だらけの映画館主。生活保護ブローカーに騙されかけた映画好きのホームレス。売れることを夢見る役者やクリエイターたち。主人公も

Dates & Venues

2 – 11 February
Institute of
Contemporary Arts
(ICA), London

2 February – 30 March

Phoenix, Leicester

3 – 28 February
Watershed, Bristol

3 – 29 February
Aberystwyth Arts
Centre, Aberystwyth

3 February – 10 March
Warwick Arts
Centre, Coventry

3 February – 11 March
Chichester Cinema at
New Park, Chichester

3 February – 23 March
Brewery Arts
Cinema, Kendal

3 February – 24 March
Films will be screened
at the Frankopan Hall,
Jesus College and
Howard Theatre,
Downing College

3 February – 13 March
Firstsite, Colchester

3 February – 30 March
Queen's Film
Theatre, Belfast

4 – 27 February
Showroom Cinema,
Sheffield

9 February – 17 March
QUAD, Derby

12 February – 6 March
HOME, Manchester

12 February – 18 March
Eden Court, Inverness

12 February – 31 March
Tyneside Cinema,
Newcastle

Screening dates vary

16 – 21 February
Chapter, Cardiff

17 February –
16 March
Dundee Contemporary
Arts, Dundee

18 February – 14 March
The Dukes, Lancaster

21 February – 27 March
Cameo Picturehouse,
Edinburgh

28 February – 14 March
The Phoenix Cinema,
Orkney

29 February – 28 March
City Screen Picturehouse,
York

2 – 27 March
Exeter Phoenix, Exeter

7 – 28 March
Plymouth Arts Cinema,
Plymouth

3 – 14 March
Depot, Lewes

4 – 25 March
Cinema City
Picturehouse, Norwich

6 – 27 March
The Ultimate Picture
Palace, Oxford

7 – 28 March
Picturehouse @ FACT,
Liverpool

13 – 30 March
Storyhouse, Chester

15 – 20 March
Broadway, Nottingham

22 – 28 March
Midlands Arts Centre,
Birmingham

Major Supporter



Sponsors in Kind



Clearspring Pentel

Cultural Partners



また、見えない糸に手繰り寄せられるかのように、この場所へたどり着いた漂流者の一人だ。かつて映画監督として作品を発表したものの、友人の死をきっかけに進むべき道を見失い、家族をも捨ててしまった青年は、銀平スカラ座とこの映画館に魅せられた人々との出会いを通じて消えかけていた生への意志を取り戻していく。その意味において、映画館はある種の「避難所」(agir)、ないしは「ユートピア」として機能している。

だが、本作品は、観客に満ちあふれていた在りし日の日本映画の黄金時代を追い求めたり、映画によって幸せな結末が得られることを保証したりするものではない。映画館は起死回生のイベントによって一時的に賑わうことがあっても朽ちつつあるし、映画愛に生きた人々も寿命には抗えない。映画館の関係者が一列になって河原を歩く葬送の場面は、映画に対する誇りと同じくらい、過ぎ去っていくものの儚さや、こうした物語でさえやがて消えてしまうかもしれないという予感に彩られている。「再生」の夢は、思い描いたようには現実とならないのだ。主人公は妻との復縁を果たすこともなく、海を前にしてダンスを踊り、再び映画を撮るかどうかもわからないまま、新たな土地へ旅立つ。タイトルに用いられている「ブルース」は、奴隷としてアフリカから連れてこられたアフリカ系アメリカ人とその子孫から 19 世紀後半にアメリカ南部で生まれた音楽だが、苦しみのなかで故郷を想い、魂の言葉を通じてその傷と苦悩を互いに分かち合うものだ。映画館は、根無し草のような人々を受け入れ、一瞬の夢を共有したあとに別の場所へ向かうだろう。

本作の監督を務めた城定秀夫(1975-)は、武蔵野美術大学卒業後、ピンク映画、V シネマなど多岐にわたるジャンルを行き来し、長編第一作『押入れ／味見したい人妻たち』(2003)から数えて、これまで 100 作を超える作品を手掛けてきた。高校演劇の戯曲を映画化した『アルプススタンドのはしの方』(2020)が低予算映画ながらヒットし、その年のキネマ旬報ベストテンにも選出された。第 36 回東京国際映画祭(2023)では「Nippon Cinema Now」部門で特集上映が組まれている。かつての「日活ロマンポルノ」と同様にピンク映画もまた、低予算や限られた撮影日数という条件のもとであらゆる題材をこなす「職人」でありながら、独自のスタイルを持つ、廣木隆一や瀬々敬久といった映画監督を多く輩出してきた。城定や脚本を執筆したいまおかしんじはその流れを組む。本作のみならず、『アルプススタンドのはしの方』や『ビリーバーズ』(2022)といった近年の城定作品では、一時的な関係性にに基づいた、家族とは異なる共同体が多く描かれている。

土田環(早稲田大学基幹理工学部、映画論／文化政策)